

話すこと・聞くことの繰り返し学習

繰り返し学習の見直し

従来の繰り返し学習というと、漢字や英語の単語を覚えさせるために、機械的に記憶させて、生徒たちが習熟できるよう練習や訓練がなされてきたイメージがあります。現在では、今まで以上に主体的に学ぶ力を育成することが求められています。単純な繰り返し学習では、単なる訓練やドリルに過ぎません。これからの繰り返し学習では、生徒たちが主体的に、積極的に取り組むようにしなければなりません。

バザール方式の利点

今までの発表学習では、調べたことをもとに1回ずつ発表していく形が多かったように思います。これでは生徒に発表する力をつけさせることは難しいでしょう。生徒一人一人が「バザール方式」で発表すると、次のような変容が期待できます。

- 聞き手をかえながら何回も同じ発表を繰り返していく中で、質問を受けるたびに説明の仕方は改善され、回を追うごとに向上していく。
- 聞く側も回を追うごとにメモの取り方や質問の仕方が向上していく。

授業改善の方向性

今までの繰り返し学習を見直し、バザール方式の利点を生かしながら、話すこと・聞くことに関わる繰り返し学習はできないものかと以下のように授業改善の方向性を探りました。

- (1) 本校第1学年で行っている「朝の読書」での成果を授業の中に生かしていき、互いを有効に結び付ける。
- (2) 学習後に、実際の生徒の読書生活において活用されるものにする。
- (3) 意欲が高くはない生徒でも個別の学習活動が主体的かつ円滑に進められるよう、学習の流れを明確にしておく。
- (4) 個人学習が中心になるため、生徒と1対1の会話の時間を設定し、生徒の気持ちや学習の状況に、できるだけアプローチできるようにする。
- (5) “わかってもらう”ことを意識させる。ただ説明するのではなく、相手に理解してもらうために話すのだという目的意識と、理解しようとする相手への思いやりと、相手にどのように理解されているかをイメージする想像力が求められる。
- (6) 説明・発表では、その事前と事後の学習活動の位置付けや学習内容が問われる。多くの場合、説明・発表をさせることにのみ目が奪われ、その前後の活動内容の吟味がなされていない。その結果、せっかくの説明・発表が国語学習として機能していない。
- (7) 話し手による一方的な説明になることを避け、質問や意見など、双方向的な対話になるよう、場の設定を工夫していく。